



川崎大師ロータリークラブ 週報

例会日 毎週水曜日 PM12:30~

例会場 大本山川崎大師平間寺信徒会館

事務局 寺210-0312 神奈川県川崎市川崎区東門前1-15-10 カーサ石井1F

Tel.044-277-7569 Fax.044-288-8550

URL <http://www.kawasakidaishi-rc.com/>

E-mail: daisi-rc@eagle.ocn.ne.jp

会長 竹田 正和
副会長 矢野 清久
幹事 須山 文夫
SAA 中村 孝

第2057回（本年度 第5回）夜間移動例会 平成27年7月29日 一晴れ一

- 司会 中村 孝 SAA
- 点鐘 竹田 正和会長

ゲストのご紹介 竹田 正和会長

殿町2・3丁目町内会 会長 相澤 弘保 様
事務局 大家さん 石井 美津子 様

会長報告 竹田 正和会長



スマイルレポート（ニコニコボックス）

矢野 清久副会長

本日のニコニコのテーマ

『皆さんで暑気払い移動例会を楽しみましょう』
一律1,000円を頂戴いたしました。



- 点鐘 竹田 正和会長

竹田年度での最初の夜間移動例会です。
今回は「韓の台所」で焼き肉です。かんのだいどころ
ではありません。はんのだいどころです。
司会は、沼田 直輝 親睦委員長です。



乾杯は、竹中 裕彦直前会長です。



沼田親睦委員長をはじめとする親睦委員会の皆様、お疲れ様でした。次回も楽しい、美味しい例会をお願いします。

日時：平成27年8月12日(水)は

休会です。（定款細則に基づく）



秦 琢二/坂東 保則/水口 衛/松本 和晃

ロータリーニュース 2015-04-02

記事 : Arnold R. Grahl

ウガンダ：部族コミュニティの存続を看護学校が支援

何千年もの間、バトゥワピグミー族はウガンダ南西部に位置するブウィンディ原生国立公園の中で、シルバーバック・マウンテンゴリラに囲まれながら暮らしていました。しかし1992年、絶滅の危機に瀕したシルバーバックの保護を目的にこの原生林が世界遺産に指定されたため、バトゥワ族は故郷を追われることになりました。狩猟採集民から農民になることを強いられたバトゥワ族は、新しい生活になかなか馴染めず、部族の存在自体が危機にさらされていました。

このような中、長い年月をかけ、米国、ウガンダ、そしてほかの国々のロータリー会員がバトゥワ族の支援に取り組んできました。最近では、看護学校の設立を通じてウガンダ南西部全体の医療を改善する試みが行われています。

カリフォルニア州の医師でありロータリー会員でもあるスコット・ケレルマンさんは、2000年、バトゥワ族が窮状に陥っていることを知りました。そこで彼と妻のキャロルさんは医療使節団として現地へ赴き、先住民のニーズを調査することに。スコットさんは自身の目で見た状況を「医療や教育の機会だけでなく、清潔な水や衛生設備も整備されておらず、土地や食料も不安定な状態にある、まさに赤貧」と表現しています。

スコットさんの調査により、バトゥワ族の38%は5歳未満で死亡していることが分かりました。これはウガンダ全体の平均値の2倍にあたります。また平均寿命は28歳であることも判明しました。

病院の建設

最初の訪問から程なくして、夫妻はバトゥワ族を支援するため、医業を含む私財を売り払ってウガンダへと引っ越し、2009年まで住み続けました。当初、夫妻は木の下で移動診療所を開き、点滴を木の枝に吊るして診療を行い、一日に診る患者の数は200人から300人、多い時には500人もいたとスコットさんは当時を振り返ります。やがて夫妻は基金を立ち上げ、ブウィンディ地域病院を設立しました。

これに一役買ったのが、スコットさんが持つロータリーのつながりでした。ロータリー財団から一連の助成金を受け、ウガンダや米国、ほかの国々のロータリー会員に支援されたプロジェクトにより、手術室や歯科用装置、太陽光パネル、そして清潔な水の提供が実現し、衛生状態も改善していきました。またこのプロジェクトを通じ、バトゥワ族の人びとは小さな家畜を飼育することで栄養状態を改善する方法も学びました。

現在、乳児死亡率は6%まで下がり、出産で命を落とす女性の数は60%も低下しています。

「何かもロータリーのおかげです」とスコットさん。「ロータリーは単に資金だけを提供するものではありません。地域のロータリークラブに呼びかければ、現地のロータリアンが集結し、プロジェクトを成功へと導いてくれるのです。ロータリーは幅広い視点でプロジェクトを捉え、『病院の建設は素晴らしい。けれども疾病を予防しなきゃならない。給水や衛生状態の整備も必要だ。それに育児について女性に教えることも大切だ』とってくれるのです」。プロジェクトの一環として、マラリア



ロータリー会員が支援するウガンダ南西部の病院で赤ん坊に予防接種を行う看護師

写真提供
Bwindi Community Hospital

発生の抑制を目的としたプロジェクトでは、部族の治療師を介して各家庭に何千枚もの蚊帳が配られました。「2006年には毎週1~2人の子どもがマラリアで命を落としていました」とスコットさんは振り返ります。「しかし、ロータリーが2万5,000枚もの蚊帳の配布を支援してくれて以来、9カ月間、マラリアで命を落とした子どもはいません。死亡率は90%以上も減少したのです」

看護学校の設立

数年前、ジェームズ・ジェムソンさんとスティーブ・ウォルフさんの二人の起業家がこの地域でゴリラを追跡しているとき、スコットさんと出会いました。スコットさんから看護学校の必要性について聞いた二人は、看護学校の計画、設計、建設の費用として65万ドル（約7,600万円）以上もの資金を寄付。これによって、2013年11月、ウガンダ・ブウィンディ看護学校が開校しました。両氏はさらに、ブウィンディ病院で働く正看護師のジェーン・アニャンゴさんをスコットランドのエディンバラにあるクイーンマーガレット大学へと派遣しました。この大学で看護学の修士号を取得したアニャンゴさんは、ブウィンディ看護学校の主任指導教員となりました。また、この看護学校の全学生に対し、1年分の教科書の内容が詰まったiPadも提供しました。

昨年は、国際ロータリー元副会長であるジェリー・ホールさんが看護教育者から成る職業研修チームを率いて2週間にわたり同学校のカリキュラムや指導要項の作成、運営体制の準備にあたりました。ホールさんはロータリーの理事だった頃、以前のプロジェクトを介してスコットさんとは面識があり、この病院の戦略計画コンサルタントを務めていました。

ホールさんが所属するネバダ州のリノ・ロータリークラブは、ウガンダ・キヒヒ・ロータリークラブをはじめとする19のクラブと連携して6万7,000ドル（約790万円）を集め、この資金とロータリー財団からの補助金など合わせて247,000ドル（約2,915万円）が、同学校の備品、教室の机や椅子、実験設備のために役立てられました。

職業研修チームが帰国すると、サンフランシスコ大学に所属する一人のチームメンバーは、同大が所有する大量のデジタル情報をアニャンゴさんが利用できるように手配。また、もう一人のチームメンバーは、看護学のカリキュラムが保存されたUSBメモリをブウィンディ看護学校に送りました。「これらのテクノロジーは、ウガンダには今までになかったもの」とホールさん。「私たちの滞在中、ウガンダ看護評議会の議長が開校式に参列し、このようなテクノロジーに非常に驚いていました」

ホールさんはこう続けます。「可能性は計り知れません。研修を受けた看護師を集落や地方に派遣すれば、その土地で安全に出産を行い、子育て支援にも従事できる看護師が増えるはず。これは今までになかったことです」